

報告番号 1 号
令和8年8月14日

根室市議会議長 遠藤 輝宣 様

政務活動報告書（会派用）

会 派 名 会派 紬

代表者名 久保田 陽

区 分	☒ 調査研究 ・ ☐ 研 修 ・ ☐ 広 報 ・ ☐ 広 聴 ☐ 要請・陳情活動 ・ ☐ 北方領土対策活動 ・ ☐ 会 議
活動テーマ・目的等	1. 白石市：学びの多様化学校「白石きぼう学園」 『個の実態やニーズに応じた柔軟なカリキュラムや教育について』 2. 白石市：子育て支援・多世代交流複合施設 「こじゅうろうキッズランド」 『集客効果や運営ノウハウ、多世代交流について』 3. 富谷市：不登校特例校「富谷中学校西成田教室」 『運営体制や独自カリキュラム、少人数指導について』 4. 富谷市複合図書館「ユートミヤ」 ※富谷市のご配慮で追加視察
期 間	令和8年8月3日（月）～令和8年8月6日（木）
参 加 者 氏 名	久保田 陽・須崎 和貴・吉田 智和 以上3名
応 対 者 （ 講 師 等 ）	1. 白石市議会 議長 松野 久郎 氏 白石市教育委員会 教育長 半沢 芳典 氏 白石市教育委員会 教育専門監 石田 康之 氏 白石きぼう学園 校長 星 健太郎 氏 2. 白石市保健福祉部 子育て支援係長 上野 裕美 氏 3. 富谷市議会 議長 畑山 和晴 氏 富谷市長 若生 裕俊 氏 富谷市教育委員会 教育部長 高橋 理香 氏 富谷市立富谷中学校(西成田教室) 校長 庄司 浩昌 氏

	4. 富谷市企画部 複合図書館センター長 今野 善徳 氏 富谷市 市民図書館 副館長 新 出 氏 複合図書館 副センター長 早坂 仁美 氏
場 所	1. 白石きぼう学園 宮城県白石市越河平字平合23番地1 2. こじゅうろうキッズランド 宮城県白石市福岡長袋八斗蒔38-1 3. 富谷市役所 宮城県富谷市富谷坂松田30番地 富谷中学校西成田教室 宮城県富谷市西成田郷田1番94番地 4. 富谷市複合図書館（ユートミヤ） 宮城県富谷市成田1丁目1-1
行 程 （ 概 要 ）	8月3日（月） 根室市内→釧路空港→羽田空港→東京駅→仙台市→白石市（宿泊） 8月4日（火） 白石きぼう学園→こじゅうろうキッズランド→仙台市（宿泊） 8月5日（水） 仙台市→富谷市役所→富谷中学校西成田教室→富谷市複合図書館（ユートミヤ）→仙台市（宿泊） 8月6日（木） 仙台市→東京駅→羽田空港→釧路空港→根室市内
内 容 ・ 成 果 等	1. 白石市：学びの多様化学校「白石きぼう学園」 【調査概要】 宮城県白石市の学びの多様化学校（不登校特例校）「白石きぼう学園」を視察した。同校は教育機会確保法に基づき設置された市立小中一貫校であり、「学校らしくない学校」をコンセプトに、不登校児童生徒に寄り添った先進的な教育活動を展開している。 視察では、授業時数を標準より約14%削減し、午前3時間・午後2時間のゆとりある日課や、始業を9時20分とする弾力的な運用について説明を受けた。 指導面では、一人ひとりの習熟度に合わせた個別学習「白石タイム」や、探究の対話（p4c）を導入した体験活動「夢スタジオ」な 

ど、基礎学力の保障と社会性の育成を両立させる工夫が凝らされている。



また、教員が子供の微細な変化に対応できるよう構造的な余白時間を生み出すチーム体制や、企業版ふるさと納税・基金等を活用した支援体制も非常に特徴的であった。

視察を通じて得られた成果のひとつに、不登校支援の本来の目的が「一律に元の学校へ戻すこと」ではなく、「ありのままを受け入れ、社会的な自立を支援すること」にあると深く実感できた点である。自己決定の尊重と心理的安全性に守られた環境において、子供たちが笑顔を取り戻し、主体的に将来へ向かう取組は大変印象的であった。



本市においても、既存の学校支援のあり方を見直すとともに、一人ひとりのニーズに応じた多様な学びの選択肢の拡充や、個に寄り添う支援体制の構築に向けて、同校の理念と実践を施策へ活かすことができるのではないだろうか。

【視察内容からの考察・感想】

学び直しと位置付ける「白石タイム」、地域や企業等との連携による「夢スタジオ」、学習活動における対話「p4c」の活用は、学びの多様化学校、根室市ではインクル



ーシブ教育の推進においても同様に実践されているものと受け取った。

また、学びの多様化を実践する際には、名称のちがいはあれが類似の取り組みに行きつくのではないかと感じた。白石きぼう学園はもとより、白石市の教育全体を通して学んだことは、「教育支援センター」の充実だと思う。

後日視察した富谷市でも同様だったが、委託であれ直営であれ、学校に行きづらさを感じている児童・生徒が先ず頼る（資料ではハブ的役割と記載されているが）機能として重要である。半沢教育長には、「なぜ義務教育学校化しなかったのか」という質問をしたが、設立当初の人数が見通せなかった旨の説明を受けた。実際に白石市の取り組みは不登校児童・生徒数は大きく減少、特に小学生は8割程度の効果があったそうだが、白石きぼう学園でも掲げている多様性や「学校らしくない学校」をその他の大規模校も含めて実践を目指すことが必要ではないだろうか。根室市のインクルーシブ教育推進特認校では、もともと特別支援学校の分校誘致をきっかけにしているが、加えて学校に行きづらさを抱えている児童・生徒の登校も徐々に増えている。白石きぼう学園では現在38名が登校しているが、当市の特認校ではその程度の受け入れは今のところ想定されていないと認識している。しかし、同学園が教員にとっても経験の場になっていることは、当市の取り組みを継続していく上でも参考となるだろう。

2. 白石市：子育て支援・多世代交流複合施設 「こじゅうろうキッズランド」



【調査概要】

宮城県白石市の子育て支援・多世代交流複合施設「こじゅうろうキッズランド」を視察した。

同施設は、子育て世代のニーズ（屋内の遊び場整備）に応え、若者の定着・定住促進や世代間交流の創出を目的に 2018 年にオープンした全天候型の屋内施設である。

視察では、発達段階に応じた 3 つの遊びエリア（わくわくパーク、のびのびランド、すくすくひろば）や選りすぐりの絵本が揃う「よむよむひろば」、飲食可能なサロンなど、多様なニーズに応える環境構築について説明を受けた。

また、運営面では特定管理・指定管理者制度を活用し、民間ノウハウを生かした魅力的なイベントの定期開催（大道芸やワークショップ等）や親しみやすい対応が図られている。





市民利用に加え市外（仙台市や福島県等）からの集客力も高く、累計利用者は57万人を超えるなど地域のにぎわい拠点として着実に成果を上げている。

視察を通じて得られた成果は、ハー

ド面の遊具充実だけでなく、企画力のある指定管理事業者との連携や柔軟な運営体制が、施設の魅力を最大限に引き出す結果となっていることを実感できた点である。スタッフの「人としての魅力」や親しみやすい環境づくりが利用者のリピートに繋がっており、単なる遊戯施設にとどまらない「多世代交流・地域定着」の場として機能している姿は非常に印象的であった。

本市における子育て支援施設の整備・拡充や民間連携のあり方を検討する上で、極めて示唆に富む知見を得ることができた。

【視察内容からの考察・感想】

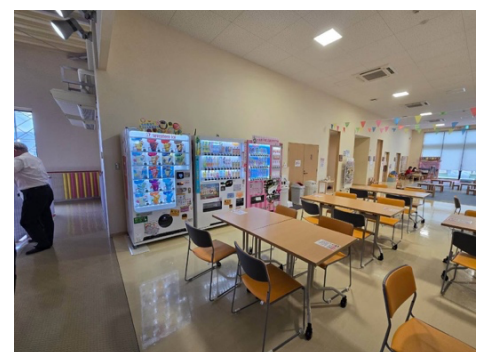
指定管理者に幅広い裁量があり、イベントによる仕掛け、タレント性のあるスタッフの配置など、単なる遊戯施設ではなくソフト面の活用が大いに参考となった。

当市のわんぱーくの現状では、公園施設の一部として遊具のような扱いとして受け取れるが、子育て支援の面をさらに取り入れることが検討できると思う。

こじゅうろうキッズランドでは一部飲食可能なコーナーもあるが、この点も含めて運用を考えてはどうだろうか。

使用料は300円に設定されているが、無償化や割引の声もあるという。施設の継続性を考えると有料化の維持というのは今後必要ではないだろうか。

また、市外の利用が9割で、隣接する仙台市においても屋内遊戯施設の建設が検討されていると伺った。その際の施設の立ち位置を今後どう考えていくのか気になるところだ。



3. 富谷市：不登校特例校「富谷中学校西成田教室」

【調査概要】

宮城県富谷市の不登校特例校「富谷中学校・西成田教室」を視察した。同教室は、不登校児童生徒の増加に対応し、学びの権利保障や社会的自立の支援を目的に、旧小学校校舎を活用して令和4年4月に分教室型特例校として開設された施設である。



視察では、全校定員20名程度の少人数環境や、各教科の免許を持つ専任教員の配置、制服・生活ルールの柔軟な運用、デマンド型車両による完全無償の通学支援など、生徒目線に立った手厚い体制について説明を受けた。



教育課程では年間1015時間の標準授業時数を確保しつつ、「総合的な学習の時間」を大幅に拡充（各学年105時間）している点が特徴的である。

地域やNPO法人与連携した農業・自然体験やSDGs探究、学び直しといった体験的・主体的な学びを通じて、生徒の前に進むきっかけづくりが図られている。

また、施設改修や運用経費、スクールバス運行費に至るまで補助金に頼らず、市の一般財源のみで迅速に整備・運営している点も注目される。

視察を通じた成果のひとつは、不登校支援において単なる居場所づくりにとどまらず、教科指導と柔軟なカリキュラムを両立させた

「確かな学びの保障」の重要性を深く認識できた点である。里山の豊かな自然や地域資源を生かした教育環境の中で、子どもたちが自信と希望を取り戻していく具体的な取り組みは感銘を受けた。

本市における多様な学びの場の確保や不登校支援施策の拡充、教育環境整備を検討する上で、示唆に富む貴重な知見を得ることができた。

【視察内容からの考察・感想】

ハード面はコミュニティーセンターとの併設ではあるが、戦前の学校を思わせるような外観だと感じた。

卒業生は全員が進学したそうだが、テストは本校で受験可能（方向での順位がわか

る）、宿泊研修2年間行わず3年目から実施（学校・市内・隣）、養護教諭は専属に配置されていないといったソフト面の運用はまだ手探りという印象だった。

白石きぼう学園で



は独立型の不登校対策特例校として設置されているが、富谷中学校は分教室型で、白石市の視察では独立型の方が教員の連携や相談がしやすいため採用したそうだが、西成田教室では特にその点は支障がないとの回答だった。

現状中学校課程13名の受け入れ状況（少人数で学ぶことがコンセプト）であるため、それ以上の対応を採る場合はどうなるかわからないが。

富谷市では人口増、児童・生徒数も多いため、西成田教室の取り組みをはじめ、今後こうした対応の拡充を図る必要に迫られるのではないだろう（すでにそのような事態かもしれないが）。



4. 富谷市複合図書館「ユートミヤ」 (富谷市のご配慮で急遽の視察が実現)



【調査概要】

今回の視察では、富谷市が誇る複合施設「複合図書館ユートミヤ」を訪れた。同施設は市民図書館、児童屋内遊戯施設「とみのわパーク」、スイーツステーション、成田市民センターの4施設を統合した拠点である。

館内は各機能が緩やかなスロープやブリッジで結ばれ、異なる目的で訪れた市民が自然に交わり交流を生む回遊動線が構築されている。

運営面では行政の縦割りを脱した連携のもと「市民共創・市民主導型」を掲げ、市民ボランティア団体「ユートミヤパートナーズ（ユートミー）」をはじめ企業やNPOなど多様な主体と連携している。



中学生が代表を務める「CRAFTOMIYA」のように、幅広い世代が主体的・自発的にチャレンジできる環境がしっかりと定着している。

開館後わずか1か月余りで来館者数10万人を達成し、市外からの来訪者も多く集める実績からは、単なる読書機能を超えた地域の賑わい創出拠点としての高い効果が伺えた。

市民一人ひとりの「やりたいこと」を可視化して後押しする仕組みや、子どもの主体性を育む先駆的な環境づくりは、本市における今後の公共施設整備や地域コミュニティの活性化施策を推進するにあたり、大変参考になる貴重な知見となった。

【視察内容からの考察・感想】

特筆すべきは整備に至る過程とその後の運用。行政が作成した当初の図書館整備案に反対した方々を味方にし、住民の主体性を重んじて（行政はあくまで支える側として）つくり上げた過程とそれに参画した方々が現在も運営に関わっていることは、単にハードをどうするかではなく、住民が主権者としての意識（シビックプライド）が高く、それに関わっているというのが如実に実感できた施設だった。一方で、そのための時間やスキルも行政側は必要で、富谷市では「富谷塾」という起業塾に取り組むことや、子どもにやさしいまちづくりの実践（子どもの権利尊重、このような取り組みが主権者意識の向上に繋がっているのだろう）をまちづくり推進の核とし、土壌形成に取り組んでいる印象を受け取った。

振り返ると、山形県酒田市の「ミライニ」、長野県塩尻市の「えんぱーく」も類似の過程を経て整備に至っている。こうした自治体を見ると、住民主体で活発な公民館活動・社会教育活動が見受けられており、北海道との歴史形成や地域性のちがいを改めて感じるとともに、今後のまちづくりには社会教育の考えを取り入れながら、行政側としては住民の意見を引き出し乗せる「社会教育主事」的な働きが必要だと再確認した。



この施設の完成までおよそ10年を要した。なぜそれまでの期間をかけたのか？ではなく、結果的にかかったと判断して良い。その根本的な要因は、市民が中心となったワークショップなどの開催から

生まれた「どんな図書館が必要なのか」「あの機能があれば、この機能があればさらに良いのに」等々、様々な市民階層の意見を継続的に集約、ブラッシュアップしたことである。

市側からの後押し（支え）はあるが、あくまでも市民の熱心な取り組みを優先する形式で実施した結果として、この施設を創り上げたということである。この仕組みを作り上げた行政側の意欲も相当だが、並行して市民側の集団により、コンセプトを具現化した施設を完成させたことに感銘を受けた。

市民と行政が互いに関わる姿勢（距離感）が醸成されている好例と言わざるを得ない。

このような理想的な関係こそが、街づくりの大きな原動力であり、本流となるべきものとするが、本市として富谷市のように市民主導で創り上げていく過程をこれだけ長期に継続できるかどうか大きな課題である。



※今回の視察は、会派紬（３名）と日本共産党根室市議団（２名）計５名の視察団で調査研究を行った。